



## 十年の歩みと展望

史料館だより  
第16号  
1991・10・10

編集・望月 浩  
発行・神戸 清江

### 生活文化史料館

平成 神戸市東灘区住本町3-1-5-80  
電話(078)453-4980

史料館館長代行 大国正美

### 設立と運営の理念

街角の小さな博物館が開設されて満十年が過ぎた。小さな灯を絶やさずここまで来られたことは私たちにとって、大きな慶びである。その間、多くの方のお力添えによって助けられ、育てられてきた。改めて厚く御礼申上げたい。

史料館は、一九八一年二月に史料室として開設された。戦前から試みながら推進してきた「本庄村史」の編纂を、深江財産区管理会が再び掛け、深山家をはじめとする多くの方から資料提供があったこと、田辺個人初代館長の着想が豊かなこと、周囲に多くの協力者がいたことが、直接の契機だった。

しかし、巨視的には、当時広く喧伝された「地方の時代」と深いかかわりがある。それは地域社会の時代」と深いかかわりがある。それは地域社会の独自性と個性を尊重することだった。しかも当時は、最も大きな成果は、地域社会と手を携え、文化活動を定着できた事だろう。

こうして設立運営された史料館の十年を時期区分すれば三つに分けられるだろう。

第一期は、史料室時代である。田辺前館長を中心として全く手探りの時代であった。活動の拠点も史料室では余りに狭く、市民の中いうつてでるゲリラ戦法の色彩が強かつた。そのおかげで、史料館は地域社会と一緒になり、多くの支える人を得た。この選択は、最良のものだった。

第二期は八三年十一月の扯張り以降、田辺前館長がニュージーランドに赴任した六年三月までである。「本庄村史」資料編纂の本格化、広くなつた史料館を拠点にした様々な文化活動の展開など、それ

までと全く異なる活動が可能になつた。第三期は、田辺前館長の趣任以降、現在までである。「本庄村史」本編の準備が始まる一方、合議制による運営、館員の得意分野の分担制、特別展の活性化、研究機関としての水準の向上を目指した。まさに田辺氏個人の発想によりかかっていた時代から、「個性の輝く時代」へ、運営の質的な転換が計られた。成否の判断は市民に委ねるが、個性尊重の方向は、史料館の理念に適うと思っている。

### 成果と課題

史料館運動十年の中で、最も大きな成果は、地域社会と手を携え、文化活動を定着した事だろう。そこで設立運営された史料館の十年を時期区分すれば三つに分けられるだろう。

第一期は、史料室時代である。田辺前館長を中心として全く手探りの時代であった。活動の拠点も史料室では余りに狭く、市民の中いうつてでるゲリラ戦法の色彩が強かつた。そのおかげで、史料館は地域社会と一体になり、多くの支える人を得た。この選択は、最良のものだった。

第二期は八三年十一月の扯張り以降、田辺前館長がニュージーランドに赴任した六年三月までである。「本庄村史」資料編纂の本格化、広くなつた史料館を拠点にした様々な文化活動の展開など、それ

深江の漁業について

史料館研究

下久保  
月惠  
友惠  
二子

はじめに

本庄村史の民俗調査も昨年末から、一ヶ月に二、三回程の定期的な聞き書きが行なわれ、昔の人々の暮らしが色濃く浮き彫りにされてきた。そして今秋には、最近調査進度の著しい、深江の漁業について特別展を行なう運びとなった。本稿では、特別展にあわせて、これまでの漁業の聞き書きの中から、漁法の概略について報告してみたい。

二、深江の漁業概況

簡略ではあるが、深江の漁業史を概観する。

深江は、古時代よりの漁業村で、一兵庫県漁業慣習録によれば、明治二十年頃で漁船数六〇、漁民九十二人と漁業が盛んなところだったことがわかる。主な漁獲物は、イワシ、エビなどで、漁法としては、地曳網漁、打網漁、手縄網漁などがあった。地曳網漁場は、「兵庫県漁業慣習録」によると東芦屋村も深江村もその区域で魚をとつてもよい)になつた。

た。

明治・大正・昭和初期と深江の漁業は栄えたが、昭和四十七年十月に東神戸一帯の浜の埋め立てにより、深江を含む神戸市東部漁協は解散し、幕を閉じた。

### 三、漁法の種類

深江の漁師は携わっていた漁法によつていくつかのグループに分かれていた。人を雇つて大規模なワシ地曳網漁を行なう網屋や、打潮網漁を中心とする中規模の漁師、セウタセ・てんぐり網漁など浜近くの小小規模網漁やハエナワ漁をする小漁師(多数)である。小漁師が網屋に雇われて地曳網漁に従事するなど、当然グループ間の交流はあつたが、日常のつきあいは各グループ内部で行なわれることが多かつたようである。

以下、主な漁法について説明する。  
①地曳網漁（四月～十一月）図-1 参照

約四〇人がかりで行なわれた大規模な漁網漁(網屋)は村外からの出稼ぎの人たちも多く雇つた。戦前、深江の網屋は七~八軒で、ほとんどが一トウ(地曳網)に必要なアミ・船の一セット・二隻の船と一緒に手こぎ船<sup>1</sup>ずつのアミ・船を所有していた。戦後まもなく人力でアミを曳くかわりに船曳網漁に変わつた。

地曳網で獲る魚はカタクチイワシが主で、加工してダシジヤコ・チリメンジヤコとして出荷した。マグロは鮮魚として市場へ出した。操業期間は、四月も十一月までだか、網を入れても採算がとれなくなつた時点で、その年の漁は終わりとしており、一年の内地曳網漁をしている期間は半年ほどだった。

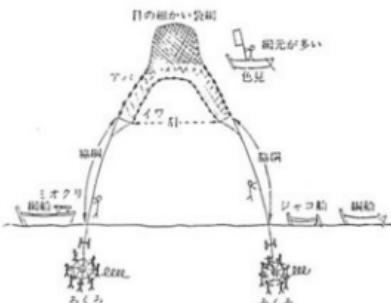


図1 地曳網漁「近畿の生業」より

二隻の船にそれぞれろくろを積み、二〇人程度度  
つが乗って、沖まで行き、オキマワシ（漁場長）が  
指示して、魚の群れにアミを入れる。次に二隻の船  
は浜まで帰り、浜にろくろを木製のいかりで固定し、  
曳き網の端をろくろにとめる。網の部分はろくろで  
浜から曳き、アミの部分は手でたぐつた。ろくろをまわす人が八人、アミをたぐる人が八人、その他四  
人の役割分担で仕事した。アミをあげる場所は青木  
・芦屋の浜。あがつた魚は手ごこぎ船で深江の港まで  
持ち帰り、加工屋に売った。

水揚げは十万円あつたら燃料代と米代で二万円、  
親方が四万円、残り四万円をオキマワシ・カジモチ  
を筆頭に分配した。オキマワシはだいたい三人前の  
分け前をもらったという。オキマワシは出漁場所を  
決め、鳥の飛来、魚のハネや魚群をみつける重要な  
一

役があつたが、戦後は魚群探知機にかわった。戦前

阪神間では、御影・魚崎・深江・芦屋・西宮・鳴尾・尼崎に網元があつたが、深江がいちばんよく獲つたといふ。とくに船曳きになつてからは、漁で一番で、深江の船が出いくと、他所の漁師がついてきたほどだった。アミについての情報交換はしなかつた。

アミのフクロの作り方とおもりのつけ方がポイントで、沖で底が深ければ網が浮かないよう下におもりをつけるなど、現場で工夫した。

地曳網漁のオフ・シーズンの冬には雇われの乗り子は郷里へ帰つたり、工事の仕事やバチンコでしのいだ。地元の小漁師はハエナワやあさり採りをして生計をたてた。

### ② 打瀬網漁（一月～八月中旬、九月～十二月）

打瀬船と呼ばれる三本マストの帆かけ船（全長六尋約十四・四m）で風を受け、アミを曳く漁法。中程度の漁師が主に自家労働力で操業した。カレイ・タコなど海底にいる魚や、エビ・貝を獲る漁法だが、季節や漁場の状態で狙う獲物を替え、それによって、アミの種類やかけ方もいろいろに変化させた。風や時期によつてどのアミを選ぶかは漁師の技術や経験の見せどころだったといふ。戦後はエンジン船が普及し、漁場までエンジンで行き、漁は風の力で行なつた。

#### 〈基本的な漁法〉

- ① 目的地までは前の二本の帆をあげ、風を間切りながら進んでいく。
- ② 適当な地点まで来たらアミをおろし、アミにつないだ網の端を打瀬船の帆柱などに結びつける

（*（二）*）に結びつけるかは使うアミの種類によ

つて異なる）。

③ 帆を三本ともはり、船の横側からの風をまつす受けるように帆の向きを整える。その時、横

風を受けた船は不安定になるので、浮き上がりてしまふ。そして手前側の舟べりからおもりを取りつけるなど、現場で工夫した。

④ 風が出ると帆に風をあて、四十分ぐらい走つてから帆を降ろし、アミを引き上げる。

⑤ ①～④を繰り返す。

（イッヂョウ網）五月～八月盆頃（*図2 参照*）

カレイ・タコなどの底もの獲る。とくに七月中旬～八月初めはシラサエビ・カレイ・アナゴなどが

産卵期で砂地にあがつてくるのを狙つた。網目の大きさはシラサエビ用とタコ・カレイ用の二種あつた。

船のトモとヘサキについたヤリダシ棒にアミの先につないだ網の両端をそれぞれつないだ。従つて、使するアミはひとつである。

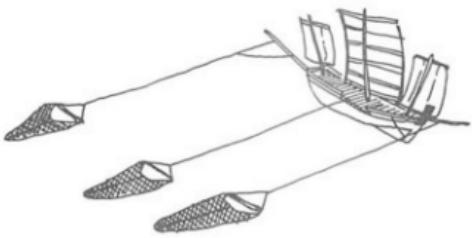
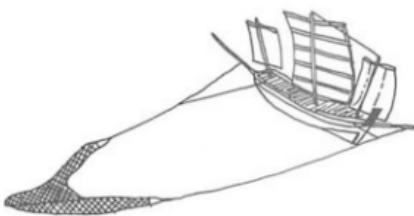
アミはフクロ・ワキで構成され、垂直に保たせるためにワキアミの手前にテギと呼ばれる三角形の板を取り付ける。それに直径一寸二分の太網をつけ、その前にマエイシと呼ばれるおもり石をつける。太網は海底のどろを搅拌して魚の目をくらませる役目をする。マエイシは風の強い時、アミが浮かないよう�数を増やすなど微妙な調整が必要だつた。

（ジョウゴ網）九月～十月月中旬（*図3 参照*）

「うわもん」と呼ばれるエビ・エビジャコ・ワタ

図2 打瀬網漁（イッヂョウ網）

図3 打瀬網漁（ジョウゴ網）



はかった。ケタはアミの入口に鉄のツメをつけ、そのツメで海底の獲物をひっかけてアミの中に入れ漁。ツメの間が獲ろうとする貝などより広すぎるヒツからず、狭すぎるとドロをつまませてしまうので、獲物によつて、何種類もの巾の道具があつた。ツメの間はだいたいアカガイ一寸三分、ツメガイ(サルボウ)九分、トリガイ一寸三分と決まつたが、貝の育ちがよい時は大きめのものを使うなど道具選びにも神経を使つた。ケタは西淀川の福(大阪市)というところで購入した。

打瀬船の各マストにひとつづつ、合計3つのアミをつけて、一度曳いた。各マストには網一本を結びつけ、マエインのところで網を両側に分けた。さらに、開口部にハリダケを入れ、おもりのウデイシを両側につけて、安定させた。

(テッポウ網) 月初め~二十日過ぎ  
ハリイカ・スタイルガレイ・タコ・アラメ・コチを狙う。形はイフチヨウアミと同じだが大きさが小さい。ただし獲物が大きいのでアミの目の大きさはジゴウガアミよりも大きい。

(テングリ網) (図5参照)

テンコチ・アラメ・キス・ベラなどセウタセ網と同じ浅瀬の獲物を狙うが、船はセウタセのものよ。漁はツメガイ(サルボウ)・アカガイを獲つた。ケタはひとつずつ打瀬網に最高で8つづけ、船の端につけたものほどアミの入口のおもり石を重くして安定を

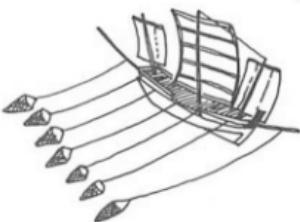


図4 打瀬網漁 (ケタ網)

ケタはアミの数が多く、水揚げは増えるがアミを掲げるための労働もきつく、腕のある人にしかできなかつた。また、風がないとケタの数がたくさんひけないので、アミの方が効率がよくなるため、アミにかかるなど魚の種類によつても使い分けをした。

### ③ 小規模な漁法

#### ヘセウタセ

五月~七月

ツブイカ・カレイ・キス・テンコチを獲る。形・

方法は打瀬網と同じだが、浅瀬で行なうため船、アミとも規模が小さい。船の大きさは五尋~六尋(約

9m~11.8m)。セウタセ網をする船は朝夕に立つ

市の合間に帰つてきて、新鮮な魚を近所に売り歩いて、現金收入を得る。五月~七月以外は地曳網の手

伝いをして生計をたてている人もあつた。

(テングリ網) (図5参照)

(ハエナワ漁) 六月~十月 (図6参照)

六月~八月を除いて年中 (図4参照)

夏の漁は、トリガイ・シラサエビ・カレイ、冬の

漁はツメガイ(サルボウ)・アカガイを獲つた。ケタ

はひとつずつ打瀬網に最高で8つづけ、船の端につけ

たものほどアミの入口のおもり石を重くして安定を

持つて目印のウキのところまで帰つてくる。二人で片方ずつ網をなぐり寄せ(これが名前の由来)船の上に曳き揚げる。夜間に出漁した。

(建網) 九月~十月

百五十尋(約270m)の長さの長方形のアミを

約百枚二つないで、海岸線と垂直の方向に張る。魚は潮の方向に逆らつて泳ぐ習性があるので、潮の方向

に流れれるアミに捕まる。獲物はコノシロ、モゼ。ときどきフカの子が入ることがあつた。一回目は夜五

時にアミを張り、八時に揚げ、二回目は朝三時に張り、六時に揚げた。深江では二〇軒ぐらいやつてい

た。



図5 テングリ網漁  
『瀬戸内海のくらしと歴史』より

に三、四十八チを持つていった。目印ウキを両端に

つけて水面と平行に張った太糸から一尋（約一・八  
m）ことに細糸をつるし、その先に釣針をつけた。

針の部分がちょうど海底につくぐらいにした。糸を  
海において、半時間後に揚げた。操業時間は、カ  
レイは八時～十二時、アナゴは十七時～二十四時、  
ウナギは、十七時～二十二時、エサはそれぞれゴカ  
イ、イワシ・サンマ・イカ、ミミズを使った。

（イカ釣）九月～十月

商先にはしていない。遊びや自家用の漁。獲った

のはマイカ。おもと針をつけた釣具にエサのイワ  
シの切り身などを固定し（図7参照）、夜間ランプを

海に投げて、半時間後に揚げた。

（タコ釣）九月～十月

商先にはしていない。カサゴとよく似た釣具にエ

サの小ガニをくくりつけ、タコを釣った。

（タコ毒漁）

網にタコ糞をたくさんつけて沈め、引き揚げて中

に入ったタコを獲る。深江では一軒だけやっていた。

（一本釣）八月末～十一月

サワラ・サゴシを狙う。いる時はタチウオも獲つ

た。エサはサワラはイワシ、タチウオはドジョウ。

イワシはおろして中骨を抜く。こうするとエサがま

わらざ、生きているようによれる。ひとつ前の船から

両舷に二つづきおを出して釣った。

（注） 戦前、エンジン船ができるまでは、夏の「ニガシ

オ」で近海で漁ができるなくなった打瀬網漁の漁師た

ちが、一本釣に切り替え、沖へ逃げた魚を追って、

須磨・淡路までも出漁した。このため一本釣のこと

を「ハシリ」とも呼ぶ。

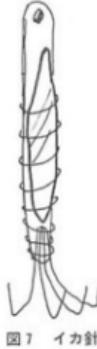


図7 イカ針

- ① 「兵庫県漁業慣行録 卷の四」  
② 八月には深江近辺の海底は腐つてドロが湧いた。これを二ガシと呼び、この時期、魚は酸欠状態になるのを避けて、沖へ逃げた。

つけてイカをおびき寄せて釣った。

（タコ釣）

商先にはしていない。カサゴとよく似た釣具にエ

サの小ガニをくくりつけ、タコを釣った。

（タコ毒漁）

網にタコ糞をたくさんつけて沈め、引き揚げて中

に入ったタコを獲る。深江では一軒だけやっていた。

（一本釣）八月末～十一月

サワラ・サゴシを狙う。いる時はタチウオも獲つ

た。エサはサワラはイワシ、タチウオはドジョウ。

イワシはおろして中骨を抜く。こうするとエサがま

わらざ、生きているようによれる。ひとつ前の船から

両舷に二つづきおを出して釣った。

（注） 戦前、エンジン船ができるまでは、夏の「ニガシ

オ」で近海で漁ができるなくなった打瀬網漁の漁師た

ちが、一本釣に切り替え、沖へ逃げた魚を追って、

須磨・淡路までも出漁した。このため一本釣のこと

を「ハシリ」とも呼ぶ。

## ◇スタッフから一言◇

☆ひさしぶりにスタッフから一言をお届けします。

前館長の田辺氏が帰国されました。園田学園女子短期大学の助教授になられました。これからのご活躍をお祈りします。

☆今号は、史料館開館十周年記念号ということで、館員の普段の地道な活動の成果の発表を、多く掲載します。後に書かれたスタッフからの一言にも、その決意が感じとれると 思います。ご期待ください。

☆大國館長を中心に、館員一同暑い夏を乗り切り、秋から始まる特別展「魚をとる」の準備に燃えています。後に書かれたスタッフからの一言にも、その決意が感じとれると 思います。ご期待ください。

（H・M）

☆9月主任研究員、毎度編集ご苦労様。私自身ライ

フワークの採石場の調査研究に加えて、石工名の採

集に走り回っている昨日です。若林泰氏を偲ぶ会も

近くに何かをお届けできるはずです。（Y・F）

☆漁師さんのお話は、聞くたびに新しい発見があり

ます。ワクワクしながらの聞き取りでした。

（K・S）

☆特別展「魚をとる」でたくさん絵を描いていま

す。批評をお待ちしています。（R・I）

☆夏休みに北海道へと計画したものの、飛行機がと

れず、断念。結局どこへも行けずじまいの夏でした。

秋からの特別展の準備に、館員一同フル回転。特別

展「魚をとる」よろしくお願ひします。（T・M）

☆この夏、北陸へ旅行に行きました。各博物館を見

学させていただき、勉強になりました。ありがとうございました。（Y・M）

# 神戸女子薬科大学構内古墳(三)

史料館研究員 藤川祐作

神戸市は、一昨年市制が施行されてから九百年にあたり、恒例の神戸まつりに協賛し、神戸深江生活文化史料館では特別展として、「東灘の歴史」展を平成元年度に行なった。

史料館研究員の道谷卓氏が、その一部を13号の「生活文化史」に報告している。その中で、岡本村全国から編保塚について位置・方位についてかなり良好な資料を提供してくれた。

さて、10号・11号で報告した、神戸女子薬科大学構内古墳の出土遺物一括を、同大学の各別の「ご配慮から借用展示することができた。

私が10号のなかで勝手な心配をした、昭和四八年に(一九七三)に測量調査をかけた、神戸大学考古学研究会の話から、かなりの遺物が紛失しているのではないかとの心配は、今回の借用でまつたく杞憂であることが確認された。遺物は、一括して図書館内のコーナーで、陳列ケースに入つて展示公開されている。ただ、女子大学ということから、誰でもが古墳を含めて、気軽に見学できない点は残念である。なお、借用に際して、大学開設当時の昭和九年(一九三四)の同古墳の全景写真が残されており、遺物とともに借用し、複写を起こした(第一図)。また、遺物については柏原正民氏の手によって、あらためて測量図を作成した。遺物の内、写真的のなかつた高坏(第2図)・青銅鏡(第3図)を報告し、借用

におもむいた際、同古墳の近景(第4図)・石室内の写真撮影を行なった(第5図・第8図)をあわせて報告する。

なお、10号・11号に若干の誤りがあつたので、次の通り訂正をしておく。10号では、壺蓋の観察で、2・4以外は焼成良を2・3と訂正。第2図の2・3を入れ替え。12号では、須恵器の観察の14は丸味で薄手の口縁部に訂正。

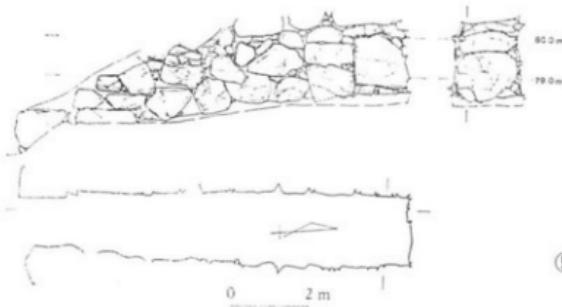
最後になつたが、ひとつ古墳の紹介に三回にわたり報告してきた結果、読者の皆様にはたいへん不便をかけた。深くお詫びしたい。また、今回も古川久雄氏の手をわざらわせた。記して感謝にかえる。一日も早い、神戸大学考古学研究会の手による、測量調査報告書の発刊を切望するものである。

- ① 昭和9年当時の遠景
- ② 高坏脚部
- ③ 青銅鏡





- ④ J Rからの遠景
- ⑤ 古墳の近景
- ⑥ 開口部から奥壁をのぞむ
- ⑦ 玄室から開口部をのぞむ
- ⑧ 玄室から奥壁をのぞむ



⑨ 石室実測図  
（『新修神戸市史』より）

神戸市東灘区深江北町四丁目八、阪神電車深江駅前  
の踏切から山側に三百メートルほど歩いた宝くじ  
券売りの店へ一歩入った。そこはもう。

商店街に面した深江のメインストリートであるこの通りは、通勤や通学、買物客といった大勢の人たちに利用されている。しかし通る人は多いけれど、マントホールの存在などにわざわざ気を止めるような人は滅多にいないのではないだろうか。

この蓋は直徑四十九・五センチ、形は円で鉄製と考えられる。表面は前にも述べたとおり、激しくくり減っているけれど、よく見ると全体に斜め格子の模様が見られる。また中心には西宮市マークを配し、その上半分を取り囲むように「西宮市下水道」の六文字が読み取れた。摩滅真具から考えて、かなり長い間使われていたことはわかるけれど、とにかく表面の六文字が右から左へ横書きされている点が注目される。横書きの文章が今のように左から書き始めることになったのは昭和二十六年以降のことである。よってこの蓋が造られたのはそれよりも前のことであろう。

どううか。東灘区は神戸の市街地のなかで合併されたのが遅く(昭和二十五年)、それ以前は御影住吉。魚崎・本庄・本山の五ヶ町村にわかれていた。昭和十一年七月、五ヶ町村や神戸市を含めた当時の阪神間三市十三町村は、合同して淀川から取水する上水道の建設を計画、阪神上水道組合を設立した。翌年

## 史料館からの手紙 ～西宮の文字の見える マンホール蓋～



柏原正民

西宮市で下水道が造られるのは昭和十年前後と考えられるけれど、同様のマンホールは今のところ西宮市域でも見つからず、貴重な存在であることだけは確かなようだ。

つっていることを確認しており、一部の地域では神戸市との合併より前に下水道を造っていたことが明らかとなっている。筆者はこのような合併以前のマンホールに興味を抱き、御影町以外の地域ではどうかと思って、東灘区内をあちこち探し歩いていたときに遭遇したのが、今回紹介したマンホールであった。

さて最後に、なぜ灘駅前西宮市の、しかも戦前もしくは終戦直後のマンホールがあるのだろうか。結論から言うと、その原因は全然わからない。

目を転じることによって、われわれの身近にあるモノが「歴史の証人」の役割を果たすことも少なくない。モノに歴史を語らせるとき、先入観は禁物だ。こちらの勝手な思い込みに邪魔されて、大事な部分を見逃してしまふ恐れがある。素直な気持ちで向かい合えば、どんなモノであつても、資料へと変身する。今回紹介したマンホールは不明な部分が多いけれど、当の西宮市域においても珍しい資料が深江にあることは、たいへん興味深い。「たかがマンホール」などと思わず的に積極的に働きかけければ、もつと大きな収穫をもたらしてくれるであろう。

「ボロは着ても心は錦」「見かけじやなくて中身で勝負」のことばは人間だけでなく、歴史の資料とも正しくおつきあいするエチケットであることを改めて思い知らされている。

以上が五ヶ町村における上水道建設の概要である。これに対して下水道に関する記録は極めて限られており、戦前に下水道が造られたかどうかですら既刊の資料からはわからない。ただ御影町にあった地域で、御影町のマークをつけたマンホールが残

# 覚淨寺の延享三年銘の瓦について

史料館員 望月 浩

## 一、はじめに

昨年の五月二十七日付けの神戸新聞に、「江戸時代中期の銘入り瓦」という見出しで、神戸市東灘区魚崎南町七にある覚淨寺の瓦のことが載っていた。新聞記事によると、本堂が老朽化して、雨漏りがするようになつたために、屋根の全面ふき替えを行なうことになった。そのときに、江戸時代中期の銘の入った丸瓦が見つかったといふのである。

瓦には、年号と人名・地名が刻まれていた、ということなので、その跡跡調査を行ない、その報告をしてみたいと思う。以下、わかつたことを書き綴つてみたい。

二、瓦の観察

新聞記事で紹介された瓦は、丸瓦と呼ばれる瓦である。これは、丸瓦と平瓦とを交互に並べて葺く本瓦葺きに使用される瓦の一つで、江戸時代以降の普

通の民家では、横断面がS字形の平瓦で其いた棟瓦葺きとよばれるものが使用されている。

丸瓦の凸面に、次のような文字が刻まれていた。

「延享三年

丙寅年

泉新村瓦子 德兵衛

正月吉日

藤助作者」

延享三年は、西暦一七四六年にあたり、江戸時代中期の徳川家重が將軍になつた次の年である。

## 三、覚淨寺について

覚淨寺は淨土真宗西本願寺末で、かつて福寿寺と呼んでいたというが、開基や由緒は不明である。

明治六年に学制発布とともに、同寺を借用して魚崎小学校が開設されている。

に建立されたといわれていた。

## 四、泉新村と瓦産業について

泉新村がどここの場所に当たるか、ということであるが、一つの村の名前にしては、不自然なので、泉(和泉国)の新という村であろうと考えた。

瓦に刻まれている「泉新村」は、現在の大阪府阪南町(平成三年秋には阪南市になる)新町と呼ばれる地区である。新村は、名前から見て他の村から分かれたと思われ、東西にあった波有子村から天正年間(一五七三〜一五九一)に分離した集落と推定されている。当初は、「北湊」と呼ばれていたようである。元禄年間(一六八八〜一七〇三)には、漁業で栄えていた記録もある。

「毛吹草」という、松江重頼が寛永十五年(一六三七)に書いた書物を見ると、和泉の項に「鳥取通茶磨貝塚斐大島草履鐵治良天川鳥子岡田千鶴石津神馬藻瓦」と名物があげられている。これらが近世初期に和泉地方で知られていた名

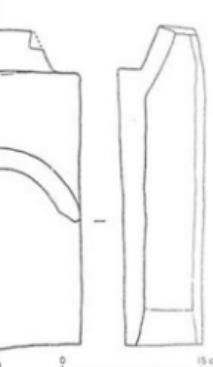
自 税付瓦  
瓦

瓦 近摺(神戸新聞社提供)

瓦 拓本(探拓 望月)

西月吉日

瓦 拓本(探拓 望月)



瓦 実測図

産である。このころにすでに、瓦という文字が見られる。近世から明治期にかけては、現在の神戸市たる中心であつたが、新村・尾崎村・波有手村など、現在の阪南町に属する地域も、江戸時代初期から瓦の产地として知られていた。

【花園史学】創刊号の福島雅蔵氏、「関東遺代土浦藩の泉州飛地統治」という論文が掲載されている。

氏は、「阪南町史」の近世部門の担当者でもある。論文のなかに、「泉州瓦の中心地は、近世後半期では、谷川村・深日村・箱作村等のほか、尾崎村・新村・波有手村に於ても行なわれていたらしい」とある。

しかし、遠く離れた覚淨寺の瓦に延享三年の銘がある。

るので、少なくとも江戸時代中期には新村ではすでに瓦生産が神戸まで販売するほど、盛んに行なわれていたことがいえよう。

しかし、新町には現在は瓦を作っているところはない。

#### 五、「徳兵衛」と「藤助」について

成子幹一氏(氏は村の中でも歴史に詳しく、「阪南町史」の協力者になっている)の話より

・江戸時代末期まで、瓦を舟で大阪・神戸方面に送っていた。

・特に港から、荷物を出荷するのではない。適当な海岸に船を近付けて、停泊する。そして、伝



神戸市東灘区と阪南町の位置関係

- 馬船のような小さい船に荷物を乗せて、停泊している船に荷物を積み込む。
- ・成子家は、新町の人たちから、「川六」と呼ばれている。川は、瓦のこと。昔、六兵衛という人が瓦の商売をしていた。作って売るのではなくて、和歌山の方から製品を大阪方面に出荷していたらしい。
- ・新町地区では、他の家の名字を呼ぶのではなくて、通称を呼びあう。たとえば、成子家は、瓦屋の六兵衛がいたから「川(瓦)六」さん。成子家から分家した家を「シンタク」さん。ひどいのは、大阪方面から来た人は、そのまま「大阪」さんと呼んでいた。
- ・「徳兵衛」「藤助」という、瓦に刻まれていた人名で呼ばれる家が現在ある。
- 辻徳治郎氏の話より



阪南町新町付近図 (1/25000)

・新町でも一番お年寄りの辻徳治郎さんにお話を聞かくが、むかし瓦を扱っていたという話は聞いたことがないと言った。ちなみに「徳兵衛」という通称で呼ばれる家は、ここだけである。むかし徳兵衛という名前の先祖がいたことは伝え聞いている。氏の名前も、徳兵衛より一字取っている。

・「藤助」と呼ばれている家は、現在中谷という姓の家である。「辻」・「中谷」両方も地城内では何軒かあるのだが、「徳兵衛」「藤助」と呼ばれる家は、それぞれ一軒だけである。「藤助」と呼ばれる中谷家では話が聞けなかった。成子氏によると、中谷家も何も知らないだろうということであった。ちなみに、檀家寺である称念寺の墓地へ行くと、第二次世界戦の時に亡くなった人の墓に、中谷藤助という名前があった。

六、和泉瓦

泉州地方の銀色に輝くいぶし瓦は、「和泉瓦」と呼ばれて、かつては、隆盛を誇っていた。岬町・阪南町を中心とした小規模な製瓦工場で、一枚一枚丁寧にへら磨きされ、焼きあげられたものが主流であった。しかし、むかしながらの製法をしている瓦工場は、現在では岬町多奈川の一軒にすぎないという。

建売住宅と共に普及した袖瓦瓦（俗称・色瓦）やブレハ瓦住宅に甚られる軽量瓦などに押されて、民家向けのいぶし瓦の需要は減少した。加えて、もともと普及タイプの瓦産地であった淡路島の品質が向上して比較的廉価に供給されるようになってきた。いぶし瓦は、焼成の最終段階で窯の通風口を閉じて不完全燃焼させ、発生した煤煙によって着色する

と同時に粘土粒子の微細な間隙を埋めて漏水を防ぐものである。こうしていくたん火を止めてから、もう一度不完全燃焼させる工程のために、袖瓦瓦のように連続焼成せざることがむずかしく、焼成炉は八百枚から千枚積み込める小型の「ダルマ窯」が用いられてきた。

瓦は、普通の民用のものでも屋根の大部分を占める平瓦をはじめ、軒先瓦・袖瓦など基本形が約十種類に分かれ、それがさらに大小や変形など、かなり多種類に分けて作られている。なお、これらの各種の瓦は、淡路瓦のようにより工程別に分業化された形の産地もあるが、和泉瓦の場合には工程・種類を問わず原則として各工場が鬼瓦を除いて全品生産している。

しかし、大阪市内から泉州にかけての寺院の多くは「和泉瓦」で屋根が葺かれている。寺院の場合には、民家と異なり反り屋根になっているため、平瓦だけでも形・大きさ・反りを微妙に変化させた十数種類が必要な他、装飾的な瓦も多い。そのため、淡路のような量産型の産地ではかえって作りにくく、加えて、寺院の場合は補充・部分交換用の需要が多いため、従来の窯元へ注文するケースが多いこともある。和泉瓦の役割も大きい。

### 七、おわりに

以上、覚淨寺に見つかった延享三年銘のある丸瓦についての調査報告を終りたいと思う。覚淨寺側にいつての記録が多く、具体的資料に乏しい報告となつた。しかし、延享三年当時、和泉国新村から船で大坂湾を北上し、運ばれてきた瓦を本堂の屋根に利用したことは、明白であろう。そしてその瓦は、當時



覚淨寺（本堂屋根小き替え前）

の新村にいた徳兵衛という何人かの瓦師に藤助といふ職人がおり、彼が記念が自信作であつたためか、作者名と紀年銘を彫つたものと思われる。また、覚淨寺と新町の泉賀寺が同じ淨土真宗本願寺派なので、当時の僧侶同志の交流があつたのではないかと思つたりもしてみたい。

なお、本報告をするにあたっては、阪南町立図書館ならびに阪南町新町の泉賀寺・成子幹一氏・辻徳治郎氏には大変お世話になった記して感謝したい。実測図は藤川祐作研究員ならびに森岡秀人氏の手を煩わせた。同じく感謝を記したい。

史料館日誌抄

史料館研究員 道谷 卓

1月2年			
1月20日	本山南小学校	3年生(見学者 91名)	11月16日 小部東小学校 3年生(見学者107名)
1月24日	西灘小学校	3年生(見学者 106名)	11月25日 友の会 第76回例会(参加者35名) 講演「ニュージーランド日本交流の最新報」 田辯眞人氏 訲、深江会館
1月27日	東灘小学校	3年生(見学者 161名)	
2月2日	春日野小学校	3年生(見学者 61名)	H3年
2月3日	渕ヶ森小学校	3年生(見学者 209名)	1月12日 本山第三小学校 3年生(見学者 123名)
2月9日	魚崎小学校	3年生(見学者 201名)	1月19日 渕が森小学校 3年生(見学者 106名)
2月10日	本山第三小学校	3年生(見学者 125名)	1月25日 魚崎小学校 3年生(見学者 216名)
2月25日	友の会 第70回例会(参加者21名) 史料館開設9周年記念・友の会総会		1月30日 東灘小学校 3年生(見学者 180名)
3月3日	神大附属吉小学校	3年生 (見学者 120名)	2月1日 西灘小学校 3年生(見学者 68名)
3月9日	福池小学校	3年生(見学者 108名)	2月2日 渕が森小学校 3年生(見学者 101名)
4月28日	1990春の特別展「ザ・ひがしなだ」展 (~9月2日まで)		2月8日 福池小学校 3年生(見学者 101名) 本庄小学校 3年生(見学者 229名)
5月20日	友の会 第71回例会(参加者50名) 講演「国際化の動きと外から見た日本」 田辯眞人氏 訲、深江会館		2月9日 本山南小学校 3年生(見学者 101名) 2月23日 摩耶小学校 3年生(見学者 83名)
5月27日	友の会 第72回例会(参加者52名) バスツアー「春日局のふる里を訪ねる」 講師 道谷 卓氏 望月 浩氏		3月10日 友の会 第77回例会(参加者 54名) バスツアー 創設10周年記念 「当尾の里を訪ねる」
7月1日	友の会 第73回例会・東灘区役所後援 (参加者51名) 講演「ザ・ひがしなだー東灘の歴史の足跡をたどるー」 道谷 卓氏 診、深江会館		講師 道谷 卓氏
7月2日	東灘区役所新規採用職員研修(見学者 26名)		5月12日 友の会 第78回例会・神戸まつり東灘区協賛会共催(参加者 100名)
10月10日	友の会 第74回例会・東灘区体育協会共催 (参加者100名) 第8回魚屋道を歩く会		講演「私と郷土史研究」 講師 落合重信氏
	案内 望月 浩氏		6月23日 友の会 第79回例会・神戸市中央区役所共催(参加者 120名) 見学会「中央区歴史物語」を歩く」 講師 道谷 卓氏 望月 浩氏
11月3日	友の会 第75回例会・東灘区体育協会共催 (参加者60名) 見学会「史跡ウォッキング・東灘」 講師 道谷 卓氏 望月 浩氏		7月5日 東灘区役所新規採用職員研修(見学者 21名)

〔協力団体〕

神戸市教育委員会／神戸市視光課／芦の芽グリーブ  
芦屋市教育委員会／国立神戸商船大学／東灘区役所  
日本玩具博物館／御影高校地歴部／本庄五校園  
神戸史学会／深江青少年協議会／サンテレビ  
東灘文化センター／大丸百貨店  
深江シヨウビングセンター／明石市立天文科学館

史料館員・役員

事務局主事	館長代行	事務局主事	事務局主事
主任研究員	主任研究員	主任研究員	主任研究員
研究員	研究員	研究員	研究員
事務局員	事務局員	事務局員	事務局員
友の会幹事	友の会幹事	友の会幹事	友の会幹事
大川	大塚	大塚	大塚
清水	久雄	久雄	久雄
納多	多田	多田	多田
春雄	康治	康治	康治
	田辺ゆかり	田辺ゆかり	田辺ゆかり
(以上常任)			